

## 黄檗禪師の「心」の考察（下）

古 田 宗 忠

然し此處に問題がある。一者變じて他者となるならば問題はない。然し、無明實性即佛性（證選歌）、煩惱與菩提無異相（十三丁裏）、得念失念無非菩提（圓覺經）の如く矛盾しつゝ矛盾せざる事は如何にして可能か。私はかゝる根據を息心に求めたい。然し息心と云ひ無心と云ひ空心と云ひ、是等は如何なる事か。「無心者無一切心也」と云つてゐる。即外に求め得られないとすれば、必然的に内に求められねばならぬ。

凡夫皆逐境生心、心遂忻厭。若欲無境當忘其心、心忘即境空也。境空即心滅、不妄心而但除境境不可除、祇益紛擾。

従つて心さへ空にしたならば、自心現前し、佛を見る事が出来ると考へられる。然し我々は佛を、外求的に見ない、但内に向つて求める。従つて外求的とは反對と考へられるのである。然し内に向つて求めるにしても、求められる限り内的外求ではなからうか。其所には尙、内に求められる對象がある。従つて、師の言の如く「起妄遣妄亦成妄」であり、「若有見處即名外道」でなければな

らぬのではないだらうか。

不用別求有求皆苦也。設使恒河沙劫數行六度萬行、得佛菩薩亦非究竟、何以故爲屬因緣。此等は、一心は決して、意識的に意識を忘ずる事に依ては到達不可能な事を物語つてゐるのではないか。従つて、此等は内見であり、「汝等慎勿觀靜及空其心」と云ふ如く著空であり、廣い意味に於ての「心生種々法生、心滅種々法滅」の生滅心と考へられる。これに依つては一心に達せられない。唯吾人に、残されたる道は、頓に證す、證契默契の一道にすぎぬ。

生佛を認め、凡聖の二見に墮し、生凡を滅する事に依つて他、佛聖にならんとする限り、矢張りその滅せられる対象を持ち、その限りに於て、「放一捉一無有歇期」でなければならぬ。寧ろ生即佛心即佛と了達し、玄會する所に生佛は生佛であつて、而も生佛でなくなり、生佛一如があると考へられる。其所に頓了の意がある。

(a) 諸佛菩薩與一切蠢動含靈同大涅槃性也。性即是心、心即是佛、佛即是法、一念離眞皆爲妄想  
 ……故學道人直下無心默契而已。(十二丁)

(b) 會實性者不見生死涅槃有別、凡聖無異、境智無二、理事俱融、染淨一如佛與衆生本來平等

一際(宗鏡錄)

「一超直入如來地(二十四丁)」「單刀直入」(古尊宿)

が頓であり、心の理解方法である。此等は直了であり、否定ならぬ否定、即ち絶対否定である。かゝる否定にして始めて一心に相應し得るのではないか。これは大捨と稱せられる掃蕩法である。「内外身心一切俱捨猶虛空無所著、然後隨方應物能所皆忘是名大捨。」この時が無心の様に思はれる。無す可き心は始に考察した様に、思慮分別の心、依存の心、住著の心等である。従つて此等の心を遠離した心こそ無心である。然し、無心は無意識空でなく覺體空である。頑空と解する限り、「尙亦空却見聞覺知即心路絕無入所、」と云はれる如く全く入所は得られないのである。無心と云つても本心がないのではない。否定さる可き心がないのである。

今云無心非無心體名無心也。但心中無物名云無心、但於心無事於事無心自然虛而靈、寂而妙、是心旨也。

これによつても無心は虚無を意味しないことがわかる。憎愛凡聖の心がないのである。従つて無心の無は有に對する無に非ず無即心であり、心即無である。無と心とは離れない。従つて無心は心無であり、心空でなければならぬ。「心無也剎那而登妙覺。心有也曠劫而滯凡夫有而不有無而不無」(宗鏡錄)である。無心は亦無念とも云はれる。大殊は、「無念者無邪念非無正念、不念有無名正念」(頓要)

と云ふ。全く真空である。真空と云つても單に、空を空するので畢竟空である。従つて六祖の、無

一物が無心である。

そこには心想すら入れられぬ。心想あれば著心であり著空である。勿論無想すらあり得ぬ。

(a) 若得定得淨、得一切所無心之時作得如是想、此妄想也(頓悟要門論二十五丁)

(b) 本來無一物、無物便是否。師云無亦不是菩提、無是處、亦無無知解(法要)

全く無心には方法がない。忽悟即得である。即今無心、直下無心、そこに心悟への正因があると考へられる。此は方法ではない。

無心が頓空心でなく、無心の心、無相の心とすれば、

若、以息念歸無念、如同寒木死灰、有成佛之期哉尙未知即念而無念、寧知一念頓圓乎(宗鏡錄)

が肯定されねばならぬ。そこに「無心者於心離心也」(頓要)と云はれる理がある。従つて無心は單なる消極的なそれではなく、積極的な絶対否定の絶対肯定の心と思はれる。「以空心觀色時亦空若不觀色時亦空不分別時亦空乃至見聞覺知亦然。」従つて「但於見聞覺知處認本心、然本心不屬見聞覺知、亦不離見聞覺知」が理解される様である。

然しこゝに問題がある。無心とは方法であるかないか。若し無心なるものが何か他に見られるものへの到達としての方法とすれば、

若有見處即名外道、外道者樂於諸見。(三十三丁)

の如く破折されねばならぬではないか。

心且不佛不衆生無有異見。總有佛見便作衆生見有見無見常見斷見便成二鐵圍山被見障。此は全く無心が方法に非ざる事を暗示するものである。

恒河沙者佛說是沙諸佛菩薩釋梵諸天步履而過、沙亦不喜毛羊蟲蟻踐而行沙又不怒珍寶馨香沙亦不貧、糞尿臭穢沙亦不惡此心即無心之心、離一切相諸佛衆生、更無差別但能無心便是究竟。

無心こそ究竟である。そこに無心は道の理があり佛行と云はれる理がある。佛行とは何であるか。其は自心を知る事である。自心を知らぬは邪行である。「知自心」とは離れる事を知る事である。これ佛行であり佛道である。無心は又三昧經には無際の心と云つてゐる。無際とは普通常識で考へる無限ではない。單なる無限こそヘーゲルの言ふ惡しき無限である。

實際之法、法無有際無際之心則入實際古力菩薩曰、無際之心智、其智無涯、無涯之心、心得自在、自在之智得入實際。(三昧經、五十八丁)

無際の心即ち無心の體驗者即無心の道人には、無心以外の人が人以外の心に相應するのではなく、心に外ならぬ人が人に外ならぬ心に相應するのである。其所には眞の相應がある。これを直下無心本體自現。如大日輪昇於虛空徧十方更無障礙。と云ふのである。従つて其所には相應すべきも

のがあるのでなく、相應の相應す可きがないと云ふのが眞の相應ではないか。この事を起信論には隨順と云つてゐる。無心と私とは對立してゐてその結果得らるゝものとは凡そ質を異にするものである。

此所に心の非合理性がある。凡そ人間的自我からは決して擱まれない深いものがある。其所には頓悟しか許されぬのである。掃蕩法と言はれるのも斯くの如く證契默契會契の別名にすぎない。従つて言下と云ひ、直下と云ひ一刹那と云ひ、これ全く心の直接性を云ふのである。絶対に二見を見ない。其所に黄檗の頓了がある。頓了以外に心の理解は不可能である。無修無證の頓了を外にして許さるゝ道は吾人に殘されてゐない。全くの飛躍である。其所には時間はない。全くの超時間超空間である。然も「心」である以上、超越であり内在である。否單なる超越も内在も許されない超越的内在である。「一切所がないが此所にもある」事が可能である。故に修證をからず直接理解に依らざるを得ないであらう。

祖師西來唯傳心佛直指汝等心本來是佛。心心不異故名爲祖。若直下見此意即頓超三乘一切諸位、本來是佛不假修證。(三十四丁)

心心不異、直指、頓了とは何であらうか。而してかゝる無心を證するに、

爾今一切時中行住坐臥俱與無心久々雖實得爲爾力最小不能頓超但三年五年十年須得箇入

所「自然會去爲汝不能如是須要將心學禪學道佛法有什麼交涉」

と云ふ如く人に利鈍ありとするのは如何に考ふ可きであらうか。又

然證此心有遲速。有聞法一念便得無心者、有至十住十廻向乃得無心者、有至十地乃得無心者、長短得無心乃住更無可修可證實無所得眞實不虛一念而得與十地而得功用恰齊更無深淺只歷劫枉受辛勤耳。

と云ふ如く、遲速あるは如何に見る可きか。遲速を見て能不能を問題とする限り「頓漸なき法」には必然大なる信が要請されねばならぬ。信不具と云ひ臨濟が信不及と云つたのも實に出發點としての信が如何に重要なかを言つたものである。「若し此の道を成せんと欲せば先づ須く大信根を具す可し」(無盡燈論信修第二)と云ひ

「我が身愚鈍なればとて卑下する事勿れ、今生に發心せざれば何時を待つてか行道す可きや。今強いて修せば必ず道を得べきなり。」(隨聞記)

と云ふたのもこれを云ふのであらう。然も信する我以外に心はない。信を外にして心はない。信心不二である。これに連關して心心不異を考へて見度い。

心心不異爲祖、と云ひ心心不異爲活祖。(臨濟錄)と云へるは何故か。心心不異爲一心、と云ふ可きでないか。勿論一心は祖であらう。而し何故に祖と云つたか。此所に問題がありはしない

が。自身本來佛——勿論これは現實の私からは絶對に云へぬ事であるが——である事の頓了は決して他に依らず、自心自悟でなければならぬ。然しこゝに祖と云はれる所以は、必然善智識を豫想するものではなからうか。「何期」の六祖の大歡喜や、臨濟と黃檗との問答に依つての見性、其處に法的人格としての善智識がなければならぬであらう。無始無明——勿論私には全然知られてゐないが——本來無始劫の凡夫たる私には自分自身大死は不可能ではないだらうか。其所に自心是佛との自悟は他に依つて誘導されねばならぬ。自心是佛、心外無佛の達了は必然智識による師證を必要とする。無師獨悟は釋尊のみ。其所に以心傳心があり、印心が存する。師の心と弟子の心、否弟子の心身と師の心身とは互に別であり乍ら、然も師心は弟子の心以外でなく弟子の心は師の心以外でない。全く一なる所其處に二人なく一人否一心以外の何物もない。弟子の心を見るものは師心であり、師心に相應せぬ限り一とはなり得ぬ二である。二人ある所師法はあり得ぬのである。忽有一人出來不於一名一相上作解者、我說此人盡十方世界覓者箇人不可得以無第二人故繼祖位。(古尊宿卷一七九九七丁)

此處に現實界は否定され、あるものは心法のみ。一器の水を一器にうつす如く、不異であり乍ら器としての師と弟子は二であり、傳燈歴史が——單なる歴史ではない、歴史は「心」によつて否定される可きものであるが——存するのではなからうか。これこそ眞の默契である。ここにこそ禪の傳



統が始まり亦其處に見出さるゝものは眞の問法であるだらう。然し嚴密に考へて見性は外にあるのではない。私の大死のところ其所にある。桃花擊竹の故事は此を物語るのである。

かくして頓了と言ふも了義と云ふも何かそこに得られる可きものがあるのではない。無心一心は絶對の無、無の無である。

當下了時不得了相無了無不了相亦不可得。如見從法得者即得。得者自不覺知、不得者亦自不覺知（古尊宿九十七丁）

亦菩提無所得。爾今但發無所得心決定不得一法即菩提心、菩提無住所、是故無有得者故曰、我於然燈佛所無有少法可得佛即與我授記。

此所に無修無證の畢竟證たる所以があり一切を絶對に拂ひ盡す無方法の方法がある。

於外不梁色聲等。於内不起妄念心得如是者即爲證。得證不得作證想即名無證也。得此無證之時亦不得作證想。是名無證即名無證也。（頓要上卷二十四丁）

次に即心即佛の考察に移らう。是れ全く一心であり、見性成佛を意味すると考へられる。然し即か非か二見をいだかざるを得ぬ我我にとつては次の問は全く肯定されざるを得ない様である。

和尚所言即者是何道理。師云覓什麼道理纔有道理便即心異。云前言無始以來不異今日此理如何。師云只爲覓故汝自異他、汝若不覓何處有異。云既是不異何更用說即。師云汝若不認凡

聖阿誰向汝道。即即若不即。心亦不心。可中心。即俱忘阿。爾更擬向何所。竟去。

従つて即と心との二を見る限り即心ではない。従つて非心非佛と云はれるのではないか。

非心非佛の頓的なものは蓋し禪の特色である。即心即佛か何か二を見て然もそれが即なる媒介に依つて統一されると見られ易い。従つて非心非佛とも云はれるが兩者共に一心の異なる表現であつて即は不即であり亦非即である。夜塘水には非の一字を擧げ、

「非者無揀擇至道而潛行密用不勞力、穩密之用地也。非謂之枯木死灰習定本地風光天真之行持、木人方歌石女起舞。實不可思議、不可稱量也。」と云ふてゐる。非を見るものは非でなければならぬ。惺々了々にして非心非佛の端的が窺はれる。「若了々見性者如摩尼珠現色、說變亦得說不變亦得」と云つて居るが、無心であり非心であるが故に、說變も可であり說不變も可である。勿論吾人からは決して窺はれるものではないが、此所に無相の本心がある。即見性底であり無心行である。亦智慧である。智慧と云つても常識の分別智又は眞偽美醜善惡の判斷智ではない。禪心、佛心の正邪の判斷智である。この智によつて見性が可能である。これは全く飛躍を要する。然らばその飛躍後はどうであらうか。亦その意識状態はどんなものか、これが次に考察する可き問題である。

其の前に私は考へたい。絶對者心との合一に於けるその瞬間の意識とは如何なるものなりや。勿論それは心の意識であり、無の意識——勿論無意識ではない無——と云はる可きものである。(a)若

無岐路心一切心取捨如木石（三十五丁）此の時無と云ひ木石とは何を云ふか。(b)心同虚空去如枯木石頭去如寒灰死火去方有少分相應、(c)汝說如今情量盡所爲道、盡道は如何に解す可きか。私は嘗て意識作用の否定によつて心に達すると云つたが然らばその否定は何を云ふのであらうか。意識は作用と内容とに區別したのであるが、即無なる作用と有なる内容とに引き離す事が出来ても作用と内容とは本來一如である。従つて今否定と云つても意識内容の否定は必然に作用の否定である。従つて人間の死——普通の肉體の死——を意味するものゝ様である。

慧可云、我已息諸緣。師云莫不可成斷滅去否。云不成斷滅。何以驗之。云不斷滅。可云了々常知言之不可及。師云是之諸佛所傳心體勿疑。（景德傳燈錄卷三）

之によつても「心」の意識にあつては肉體の死を意味するのではなくして、寧ろそれを玄會する所にある様である。然し此所に知ると云ふ事は一體何を意味するか。感覺的知覺を以て知るのではない。感覺的智以上、否寧ろ心眼によつて知るのである。然し此處に問題がある。常識は常に何かを意味して居り、知る可きは常に知つて居る事と考へる事である。然しかゝる考は一體どうであらうか。

それが意識内のみの事にしても、最早や知ると云へばこの知が外界的對象ではないにしても一種の内的外界である。その意味に於て一種の對象ではなからうか。其處には既に見るものと見られるも

のとの對立があり、それは高次の生滅心を意味しないだらうか。

所以祖師云認得心性時可說不思議、了々無所得時不說知。此事若教會何堪也。

の如く常識は不知でなければならぬ。了々常知即不知でなければならぬ。「心」は一心が知るのである。知ると知られるは峻別出來ない。否能知所知なき所それが常識である。然らばその後の生活は一體どうであらうか。

默契契悟の結果、私は全く内外身心善惡美醜眞僞一切の相對から離脱して、一切身心双忘一切俱絶のものとなる。従つて内感の對象からは勿論、外感の對象等の一切からの離脱である。之は一切の自然界にも住せず、さればと云つて精神界にも住せざる獨脱無爲のものである。「我此法門從上以來光立無念爲宗無相爲體無住爲本」(定慧第四)の如く一切からの解脫である。

大殊の

(a) 莫思量善惡當所出三界。

(b) 不住一切所者不住善惡有無内外中間、不住空不住不空不住定亦不住不定即不在一切所、只箇不住一切所即是住所也。(頓悟要門)

の如く一切からの離脱である。此處に現實の全き否定、人間の否定、理性の否定がある。如何なる理解も絶對に投げ出されねばならぬ。此處に「無心見道」と云へる理があるのである。一

切から離脱する事によつて現實界に住しないのであるが、却て絶対の否定即絶対の肯定の消息が窺はれるのではなからうか。次にいさゝか無所得の生、悟後の生に就て考察しよう。

(a) 三千世界都來見箇自己心外無法論目青山虛空世界皎々地。

(b) 終日任運騰々如痴人相似世人盡不識備一切法透汝心不入。

(c) 無始以來不異今日。

(d) 終日喫飯未曾咬著一粒米、終日行末未曾踏著一片地。與麼時無人無我等相、終日不離一切事、不諸境惑方名自在人。

の如く全く宗教的自由の世界である。舊來迷悟の世界は無迷悟の世界と化する。——否無迷悟そのまゝの世界である。即心即佛、任運の絶対行、行的智の世界である。我即世界、世界即我である。自心は全く否定肯定を絶するものである。「心」はかくして絶対の無でなければならぬ。絶対無としての心は其處に縁に依つて自己を現はし來るのである。

一切の根據たりし「心」は有として一切に於て蘇り來るのである。我は無であり然も一切に於て蘇る。我は他に於て我を見出し、他は我に於て他を見出す。此處に彼が「捨」と云つた理が存するのではなからうか。過去心不可得過去捨、現在心不可得現在捨、未來心不可得未來捨、所謂三世俱捨は、然し乍ら捨てるのではなくして捨てられてゐるのである。單なる捨は不捨に對しての捨であ

る。絶對判斷に於ては捨即不捨でなければならぬ。此處に大捨が見られるのである。其處には瞬間的存在は一切見られぬのである。

念々不見一切相莫認前後三際前際無去住今際無住後際無來。(法要)

時間の常識は現在に過去に流れ、未來は未だ來らず、未來より過去に流れそれ自體流れの如く思惟する。然し斯る考へ方をもつて心を見るならばそこには非常な隔があるのではないか。前句は之を否定し去つたものである。

念々證寂滅諸佛見衆生終日生而無生、終日滅而無滅即大乘果、(古尊宿語錄)

生が無生滅、滅が不生滅。其處に「心」の作用を見る。無なるが故に無として出で有として出るのである。従つて、現在の存在は唯現在の刹那に於てのみ存し、次の刹那には總て滅に歸してゐるのである。然も亦新たな次の刹那總てが無端に生じ來る。不思議生起の世界である。大千沙界海中漚一切聖賢如電拂、水中の泡の如く生じた瞬間既に滅に歸してゐる。而も又生するのである。生ずる瞬間は滅に歸する瞬間である。生滅は全く同時的である。かくして全き眞の無常は眞實に不可得でなければならぬ。

不起一切心諸緣盡不生即是身心自由人不是一向不生是隨意而生。

現在の刹那の行は絶對自由である。何物と雖も我の行を制約するものでない。何故なれば我即心で

あり、我の自心を外にして別に佛がないからである。然も必然的の自由である。此處に因果業報の世界に在り乍ら然も因果から自由である。否現實界からの離脱によつて因果は考へられぬのである。而も因果から全く自由、因果の使得者となるのである。無明であり乍ら然も無明でない。此處に自由人としての絶対行が開かれ來るのである。

而して一度意に従つて生ぜし行は、決して滅として消へ失せる事なく歴史を超えながら、而も非連続的な連続の行として刻々我の業として生じて行くのである。此處に終日生じて而も無生、終日滅而無滅の自由人の知的行がある。因果中にあり乍ら因果を脱する。否不落因果なる故不昧因果なのである。

至<sub>二</sub>晚參<sub>一</sub>師舉前因緣次。黃檗即問古人錯對一轉悟落在野狐身同人轉々不錯是如何。師云近前來向汝道。黃檗近前打師一掌。師云將謂胡鬚赤更赤鬚胡。(古尊宿語錄卷八十二丁)

かく不昧因果中に不落因果が可能なる爲には、瞬間々々に於ける我は絶対自由、否最早や自由とは云ひ得ぬ絶対自由にあらねばならない。此の自由こそ我を因果に落ちしめずして却て因果を創造せしめて行く主たらしめるものである。絶対自由なる我は因果海中を離脱するが故に不昧因果も可、不落因果も可である。

不起一切心諸緣盡不生即是身心自由人。是不一向不生是隨意而主。

の如く現在刹那の行は絶対自由である。何物も私の行を制約するものはない。而も必然的自由なるが爲に因果業報の世界であり乍ら因果に墮せず。寧ろ因果を獲得する。絶対の無心行が百丈に對して打師一掌として表はされたのではなからうか。汝毎日行住坐臥出言瞬目同無漏、(二十三丁)刹那は刹那を追ふて決して止まらぬ。無常不停である。心は無常として自己を實現してゐるのである。否無常即心なのである。單なる無常は「心」とは云へない。刻々無常なるが故に生滅であり乍ら無生滅である。固定せし無常なるざるが故に、常に生滅の世界に自己を表はす。それは有爲でなくして無爲である。不思議生起の世界である。因果一如の世界に於ける行はそれ自體絶対的價值——無價値の價值——をもつのである。現在の私の生は唯必然的な行に依つてのみその意義が十分發揮されるのである。現在の私の生は未來の私の爲の手段でなくして、刹那々々念々の生その儘絶対的生である。然も佛性としての「心」はその刹那に全く露現してゐるのである。禮佛問法に依つて未來に福を願ひ希望するが如き功利的行爲は絶対に否定されねばならぬ。今を外にして未來を望む以上二見であり、馳求心、求心所得あるの心である。一切心なく無心に刹那々々の行を無碍に行じつゝ、未來に何等求むる所なき般若行こそ、三昧の世界、無所得不可得の生である。

師於佛殿上禮佛。沙彌云不著佛求不著法求不著衆求長者禮拜當何所求。師云不著佛求不著法求常禮如是事。沙彌云用禮何爲師即掌。



禮拜と云つて無對象を何故禮するか。かゝる問を發する事は沙彌と同じく斷見に陥れる證據である。求めずして而も禮拜する。そこに眞の宗教性がある。達磨も此に關して

所在之所即爲有佛自心是佛、不應將佛禮佛、但是有佛菩薩相貌忽爾現前。亦功不用教我心空寂本無如是相貌若取相即是禮魔盡落邪道若是幻從心起即不用禮、禮者不知知者不禮、禮被魔攝恐學人不知故作是辨（血脈論四十八卷諸宗部卷三十五）

と云つてゐる。斯くして眞の生活は無所得でなければならぬ。

今黃檗の「心」の考察を終るに際して彼の禪法の中心が一心自心に存しその理解が如何なるものか、亦「心」が全く超現實的超人間的であり、而も遍在性、不變性、絶對自由性を持つものである事が雜然乍ら理解し得たと思ふ。最後に何物をも得ず、解決すら得なかつた事を告白して「心」の理解の爲に實踐に登る可き事を知つた。

如今會此意何用驅馳但隨緣消田業更莫造新殃  
の無心の行こそ我等の目標とならねばならぬ。（了）